

令和 7 年度

「運営に関する計画」

中間評価

大阪市立味原小学校

令和 7 年 10 月

## 大阪市立味原小学校 令和 7 年度 運営に関する計画・自己評価（総括シート）

## 1 学校運営の中期目標

**現状と課題**

令和 6 年度の全市共通目標・学校園の年度目標とともに、ほとんどの項目で目標の数値を上回ることができた。特に、【安全・安心な教育の推進】での「いじめは、どんな理由があつてもいけないことだと思いますか」の項目では目標を 3.6 ポイント、【未来を切り拓く学力・体力の向上】での「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」の項目では目標を 6.2 ポイント上回ることができた。また、【学びを支える教育環境の充実】での第 2 期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準 1（時間外勤務時間が 45 時間を超える月数 0、かつ、1 年間の時間外勤務時間が 360 時間以下）を満たす教職員の割合」の項目では目標を 37.5 ポイント上回ることができた。

一方、【学びを支える教育環境の充実】での「授業日において、児童の 8 割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の 50% 以上にする。（ただし、事務局が定める学校行事等 ICT 活用が適さない日数を除く）」の項目では目標を 8.0% ポイント下回った。「まなびのポータル」を積極的に活用することが今後の課題である。

**中期目標****【安全・安心な教育の推進】**

- 令和 7 年度の全国学力・学習状況調査の「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的に回答する児童(生徒)の割合を、85% 以上にする。
- 令和 7 年度の大阪市小学校学力経年調査・校内調査の「学校のきまり(規則)を守っていますか」に対して、肯定的に回答する児童(生徒)の割合を、92% 以上にする。
- 令和 7 年度の全国学力・学習状況調査の「自分にはよいところがあると思いますか」の項目について、肯定的に答える児童の割合を、77% 以上にする。

**【未来を切り拓く学力・体力の向上】**

- 令和 7 年度の全国学力・学習状況調査における、国語・算数の平均正答率の対全国比を上回るようにする。
- 令和 7 年度の全国学力・学習状況調査の「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができます」との項目について、最も肯定的に答える児童の割合を、35% 以上にする。
- 令和 7 年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査における体力合計点の対全国比を上回るようにする。

**【学びを支える教育環境の充実】**

- 令和 7 年度の授業日において、児童の 8 割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の 75% 以上にする。（ただし、事務局が定める学校行事等 ICT 活用が適さない日数を除く）
- 第 2 期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準 1（基準 2）を満たす教職員の割合を、令和 7 年度末に（基準 1 56.4%・基準 2 84.9%）にする。

## 2 中期目標の達成に向けた年度目標（上段）と現時点での結果の総括（下段）

【安全・安心な教育の推進】	
①	<p>大阪市小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことがありますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を 90%（大阪市 R7 目標 90%、本校昨年度 83.6%）以上にする。</p> <p>6月の結果は、86.1%であった。学年によって結果にはばらつきがみられるため、学年の実態に応じた取組を道徳教育や人権教育を通して、講じる必要がある。</p>
②	<p>大阪市小学校学力経年調査における「学校のきまりを守っていますか」の項目に対して、肯定的に回答する児童の割合を 92%（昨年度 91.1%）以上にする。</p> <p>6月の結果は、96.5%だったことから、概ね達成しているが、学年によってばらつきが見られる。特に廊下や階段を走っている児童が見受けられ、全校朝会や児童会による声掛け、ポスターなどで啓発し、実行していく。</p>
【未来を切り拓く学力・体力の向上】	
③	<p>大阪市小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を 35%（大阪市 R7 目標 35%、本校 R6 学調 36.2%）以上にする。</p> <p>6月の結果は、57%だったことから概ね達成しているが学年によってばらつきが見られる。全学級で、多様な他者（同学級や同学年、異学年の児童、地域の人等）と協働する授業を行い、異なる考え方の組み合わせ、よりよい学びを生み出すことを目的とした「協働的な学び」を実現する。</p>
④	<p>大阪市小学校学力経年調査における「朝食を毎日食べていますか」に対して、肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を 100%（本校昨年度 98.8%）とする。</p> <p>6月の結果は、96%だったことから概ね達成しているが、学年によってばらつきが見られる。1学期の結果を集計し、朝食を毎日食べることが難しい児童を毎月の生活指導委員会で把握する。各家庭の事情や生活環境の違いなどが要因として考えられるため、担任だけでなく教職員全員で個に応じた改善策を考え、実行する。</p>
【学びを支える教育環境の充実】	
⑤	<p>授業日において、児童の 8 割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の 75%（大阪市 R7 目標 75%、本校昨年度 42.0%）以上にする。（ただし、事務局が定める学校行事等 ICT 活用が適さない日数を除く）</p> <p>5月 86.6% (78.4)、6月 86.2% (74.6)、7月 88.5% (76.7) であり、目標を達成できている。今後も継続して取り組んでいく。</p>
⑥	<p>第 2 期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準 1（時間外勤務時間が 45 時間を超える月数 0、かつ、1 年間の時間外勤務時間が 360 時間以下）を満たす教職員の割合を 56.4%（大阪市 R7 目標 56.4%、R6 本校 87.5%）以上にする。</p> <p>9月までの基準 1（※時間外勤務時間が 45 時間を超える月数 0、時間外勤務時間が現在 180 時間以下）を満たす教職員の割合は 79.17%（23 名中 19 名）であり、目標を達成できている。今後も継続して取り組んでいく。</p>

(様式2)

## 大阪市立味原小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準 A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<b>【安全・安心な教育の推進】</b> <p>① 大阪市小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないかことと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を90%（大阪市R7目標90%、本校昨年度83.6%）以上にする。</p> <p>② 大阪市小学校学力経年調査における「学校のきまりを守っていますか」の項目に対して、肯定的に回答する児童の割合を92%（昨年度91.1%）以上にする。</p>	B

年度目標の達成に向けた取組内容(上段) 目標の達成状況を測る指標(中段) 現時点での結果と分析(下段)	達成状況
<b>取組内容①【いじめ・不登校・問題行動・児童虐待等への対応】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>生活指導校内委員会（いじめ防止対策委員会、不登校・虐待対策委員会）を月1回以上実施する。配慮を要する児童に関する情報、意見交換、指導についての検討、共通理解、またいじめアンケートを基に情報の共有を行う。</li> <li>校務支援SKIPの「いいとこみつけ」機能を活用し、全児童の実態をいつでも教職員全員が把握できるようにする。</li> <li>いじめ・不登校・問題行動・児童虐待（ヤングケアラー）の調査を関係諸機関と連携しながら進める。</li> <li>学習者用端末の「スクールライフノート」を活用し、いじめアンケートを学期に1回以上実施する。</li> <li>集団生活に必要な学校でのやくそく（運動場の使い方・校時表・言葉遣いの話型・持ち物）を視覚的に示し、また月に1度の児童朝会にて全体に指導し、児童自ら実施できるようにする。</li> <li>「学校安心ルール」を各教室に掲示し、内容の理解について発達段階に応じて指導できるようにする。</li> </ul> <p><b>指標</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>年度末の校内調査において、「いじめの可能性に気づいた時点で、直ちに管理職（校長・教頭等）に報告している」とする教員の割合を100%とする。</li> <li>年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率（昨年度2.3%）を前年度より減少させる。</li> <li>年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合（28.6%：7名中2名）を増加させる。</li> <li>年度末の校内調査において、暴力行為発見件数を6件以下（昨年度6件）にする。</li> </ol> <p><b>結果と分析</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>不登校児童（9月時点で15日以上欠席）の在籍比率は1.5%、前年度不登校児童の改善の割合は2.3%、暴力行為発見件数は12件である。</li> </ul>	B

- ・毎月の生活指導委員会実施（5月14日、6月17日、7月4日、9月4日）や、「いいとこみつけ」機能の活用（9月末現在127件の入力）、スクールライフノートを活用したいじめアンケートの実施（6月）、学校安心ルールの掲示（4月～）および確認をすることで児童の実態をすぐに把握・共有し、全教職員で見守る体制を作っている。また、生活指導面で課題のある児童に対し、校内会議（週2～3回）やケース会議（7月30日、8月5日、9月18日）を開き、児童への指導について話し合う機会を設けている。
- ・トラブルにつながると予想される事案が発生したときは、緊急で集会を行い、啓発するアナウンスを行っている。（今年度は10月1日にオンラインにて緊急集会を実施）
- ・不登校が長期化しないためには、対処療法的な対応や指導ではなく、チームの対応力が必要である。学級・学年・特別支援担当・養護教諭・管理職・SC・SSWなどの関係諸機関と連携し、日々のアプローチを継続している。また、校内会議（週2～3回）、スクリーニング会議Ⅱ（5月20日、7月18日）を開いたり、教育相談（こども相談センターなどを含む）も計10回行ったりし、不登校傾向にある児童や保護者と学校との関係が途絶えないようにしている。

## 取組内容②【防災・減災教育の推進】

- ・家庭連絡票に、緊急時に伴う引き渡しの際に引き取りに来る保護者を記入する欄を設けて、年度当初から把握できるようとする。
- ・全児童の住所を確認し、地区別集団下校がしやすい班編成を行い、緊急時に伴う集団下校訓練の企画・運営をする。
- ・火災・地震・津波・不審者による避難訓練を年間3回実施する。
- ・1934年9月21日に関西地方を襲った室戸台風で、味原小学校の児童16名、教職員2名が亡くなつた。被災者を悼む心と次代への教訓として、災害の記憶を忘れないように心がけるようにする。

### 指標

- ⑤ 校内児童アンケート調査（1月調査）で「学校にいる間に、火事や地震などが起こった場合、先生の指示を聞き、落ち着いて避難することができますか」の項目について、肯定的に回答する児童の割合を100%（昨年度97.3%）とする。

### 結果と分析

- ・指標⑤に関する6月の結果は、97.6%だった。
- ・班編成を再編し、地区別集団下校をスムーズにできるようにした。地区別集団下校を実施した（5月14日）。緊急時に活用する地区別集団の班と児童会で活用するたてわり班と混乱する児童もいる。ただ集団下校訓練時、いきいき活動、学童や保護者のお迎え等が非常に多く、実際に全員での実施とはいかないので一人一人の班や下校時のようにすを児童・教職員が確認できるように工夫する必要がある。
- ・火災（4月15日）・地震・津波の避難訓練（9月2日）を計画通りスムーズに実施することができた。身近に起こった地震や災害を動画視聴したり伝えたりして、防災についての意識を持つことができた。
- ・9月4日、室戸台風での被害及び台風災害への備えについて、児童朝会でパワーポイントを用いて指導を行った。
- ・1月には、不審者が現れたときを想定した緊急集団下校の避難訓練を予定している。
- ・保護者等と集団下校の考え方を共通認識するために、マニュアルや文書で知らせる。
- ・室戸台風の災害の被害（本校の身近な被害）と、各教科・領域とを関連させた授業実践を行う。

B

### 取組内容③【安全教育の推進】

- 学級活動の時間を中心に、他教科等の時間と関連させながら情報モラル教育を行う。外部講師を招聘し、出前授業を行う。

#### 指標

- ⑥ 校内児童アンケート調査(1月調査、5・6年生と5・6年生保護者対象)で「スマホの危険性や適切な使い方について理解していますか」の項目について、肯定的に回答する児童の割合を100%、保護者の割合を93%以上にする。

B

#### 結果と分析

- 指標⑥に関する6月の結果(5・6年生対象)は、98%だった。
- 保護者については今後アンケートを実施する予定である。しかし、スマホの使用や所持については、校内でも情報端末機器はすでに活用がすすんでいるため、全学年で発達段階に応じて情報モラル教育を積極的に進めていく必要があり、高学年は外部講師の招聘・出前授業も引き続き計画を進めて取り組めるようにしていく。
- 1月には、外部講師を招聘し、5・6年生を対象とした情報モラルに関する出前授業を行う予定している。またその際、保護者による参観も可能とし、啓発としての取り組みを積極的に実施する必要がある。

### 取組内容④【道徳教育の推進】

- 道徳教育の推進を図る研修を行う。
- 3つの重点内容項目（親切・思いやり、規則の尊重、個性の伸長）に関する公開授業を行う。

B

#### 指標

- ⑦ 道徳教育に関する研修を受講して「自校の取組に活用できた」と回答する教員の割合を100%（昨年度94%）とする。

#### 結果と分析

- 5月26日に内容項目「規則の尊重」の公開授業を行い、教員の道徳授業力の向上を図った。
- 11月には内容項目「個性の伸長」、2月には「親切・思いやり」の公開授業を予定している。
- 本校の取り組み「道徳科授業における、子どもの本音を引き出す発問づくりの工夫～4つのDの言葉（でも、だって、どうせ、どう考へても）を使った、問い合わせ返し発問の効果～」を大阪市内の3つの小学校にて、校内研修の講師として、研修内で報告をした。

(7月18日に本田小学校、7月22日に西三国小学校、7月23日に今津小学校、また、11月19日には長居小学校にて研修講師として、報告をする予定である。すべての学校にて感想・助言をいただき、本校にとって有益な示唆を受けた。

### 取組内容⑤【キャリア教育の充実】

- 体系的な「キャリア学習」に取り組むための年間指導計画を作成し、実施する。
- 生活科、総合的な学習の時間を中心に、外部の方（地域の人や外部講師等）と接する機会を各学年、年間で1回以上設ける。

#### 指標

- ⑧ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「将来の夢や目標をもっていますか」の項目について、肯定的に回答する児童の割合が81%（大阪市R6目標80.5%、本校R6学調86.5%）以上にする。

B

### 結果と分析

- ・ 指標⑧に関する6月の結果は、83%となり概ね達成している。
- ・ 各学年でキャリア教育の年間指導計画を作成し、それに基づいて毎月教科と関連させながら実施している。
- ・ 年度初めや学期末、遠足や運動会などの学校行事において、キャリアパスポートを活用して目標の確認や振り返り活動をしているが、実施して終わるのではなく、振り返りから見えてきた課題を次の目標へつなげるような取り組み方の工夫が必要。
- ・ 生活科・総合的な学習の時間を中心とした、カマキリ博士の出前授業、天王寺区社会福祉協議会・地域ボランティアの出前授業、玉造日出商店街での見学・お店番体験、味原クラブとのボッチャ大会、高齢者施設の職員・利用者さんとの交流、運動場の芝生化や管理に関わっている方にお話を聞く会などの活動を通して、学校外の様々な人の思いや生き方に触れることができた。
- ・ 5年総合では、OEN (Osaka city Education Network) を活用した様々な企業からのキャリア教育出前授業で「働くとは？」をテーマに、仕事をするうえで大切にしていることややりがいなどを聞かせていただき、業種が違っていても仕事に対する共通した思いを知ることができた。今後は、家族・地域など自分により身近な人とのかかわりを通して、学んだことを自分の生き方へつなげていく。今後も積極的な連携を進展させていく。

### 取組内容⑥【人権を尊重する教育の推進】

- ・ 「『学校園における校内人権教育・啓発推進計画』実施計画」を作成し、実施する。

### 指標

- ⑨ 年度末の校内調査において、「『学校園における人権教育・啓発推進計画』実施計画」の達成評価において、「達成できた」と回答する教員の割合を100%（昨年度97%）とする。

B

### 結果と分析

- ・ 人権教育年間計画を作成し、各学年の状況に応じて計画をもとに実施を進めている。
- ・ 今年度も全学年でLGBTQ+に関する教育の推進を計画し、9月26日に全学年の取組状況を確認した。現時点で、各学年の実践を積み重ね、年度末には各学年の系統表を作成するなど、校内全体として取り組みを進めていく。また、10月10日にゲストティーチャーによる出前授業、教職員研修（指導例の紹介等）をし、その後各学年での授業を行う予定である。

### 取組内容⑦【インクルーシブ教育の推進】【多文化共生教育の推進】

- ・ 児童理解研修会を学期に1回以上実施する。配慮をする児童に関する情報、意見交換、指導についての検討、共通理解を行う。
- ・ たてわり班活動を月1回以上実施し、自分の長所や自分らしさに気づき、活動の中で発揮できるようにしたり、自分の思いや相手の気持ちを大切にする場を設定したりする。
- ・ 全校遠足、味原フェスティバル、たてわり班活動などでは「リーダーシップ」「フォロワーシップ」の役割を示し、学年や立場に応じて責任を果たそうとすることができるようとする。

C

- ・児童全員が場に応じたあいさつや言葉遣いが身につけられるように、児童会児童を中心に取組を考え、実践できるようにする。

#### 指標

- ⑩ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「自分には、よいところがあると思いますか」の項目について、肯定的に回答する児童の割合が89%(大阪市R7目標77%、昨年度88.3%)以上にする。
- ⑪ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の項目について、肯定的に回答する児童の割合が100%(大阪市R7目標96%、本校R6学調97.5%)とする。

#### 結果と分析

- ・指標⑩に関する6月の結果は、86%であった。
- ・指標⑪に関する6月の結果は、98%であった。
- ・児童理解研修会の実施(5月12日)、児童集会(第1木曜日以外の木曜日)やスマイルタイム(9月末時点10回)については当初の計画通りに進められており、さらに児童同士の縦のつながりを深められるような活動を児童会メンバーで適宜話し合いを進め実行できるようにしている。
- ・またその活動の中で自分の思いを伝えたり、相手の気持ちを大切にしたりする場を設定し、さらに令和7年度版「100のなかよし言葉」を完成させ、仲間を思いやる気持ちを育んでいくようにしている。活動の最後には振り返る時間を設け、自分が気づいていない素敵なところに気付いたり、自分のよいところや人の役に立つことのよさに気づいたりできるような時間にしていくよう、継続的に声をかけていく。
- ・「100のなかよし言葉カレンダー」を作成し、今日の言葉を各学級で繰り返し発し、学校全体として仲良し言葉がたくさん使われること意識させるような声かけの時間も前日の時間や当日の朝の時間に確認している。
- ・月に5回ほど異学年交流の場を設けている(児童集会・スマイルタイム)。ただ集まるだけの活動にならないよう毎回めあてを設定し、リーダーシップ、フォロワーシップをとれるように計画している。
- ・児童会を中心に、毎朝のあいさつ運動を実施しているが、場に応じたあいさつや言葉遣いが身についているとは言えない。立つ場所や時間を見るなど、実施内容を改善していく必要がある。11月には今年度2回目の「あいさつ週間」としての全児童対象のあいさつ運動を予定しているので、10月末の代表委員会で、実施の方法については話し合いをする。また教職員が意識して声を掛けたり、場に応じた言葉遣いの提示をしたりして児童の意識を高めるようする。
- また、児童自身が「なぜ気持ちのいいあいさつや、適切な言葉遣いが大切なのか」を理解するためにも、11月に実施予定の「あいさつ週間」を行う。その際、事前指導として低学年から高学年までが共通の「気持ちのいいあいさつ」のイメージをもてるよう、児童会のメンバーで、児童集会時に寸劇を行う。

## (様式2)

## 大阪市立味原小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準 A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p><b>【未来を切り拓く学力・体力の向上】</b></p> <p>③ 大阪市小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を 35%（大阪市 R7 目標 35%、本校 R6 学調 36.2%）以上にする。</p> <p>④ 大阪市小学校学力経年調査における「朝食を毎日食べていますか」に対して、肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を 100%（本校昨年度 98.8%）とする。</p>	B

年度目標の達成に向けた取組内容(上段) 目標の達成状況を測る指標(中段) 現時点での結果と分析(下段)	達成状況
<p><b>取組内容⑧【就学教育前カリキュラム等に基づいた教育の推進】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>味原小学校教職員が味原幼稚園の公開保育、公開授業後の検討会、作品展に参加したり、味原幼稚園の教職員を味原小学校の公開授業や討議会に招待したりして、意見交流を行う。学期に 1 回以上、幼小連携部会（小学校・幼稚園職員で編成）を行い、「味原アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム」の検討を行う。</li> </ul>	
<p><b>目標</b></p> <p>⑫ 年度末の校内調査において、「幼小連携に対する意識が高まってきたか」に対して、肯定的な「高まってきた」と回答する教員の割合を 100%（昨年度 100%）とする。</p>	
<p><b>結果と分析</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>味原小学校、味原幼稚園、味原保育所と連携し、保幼小接続の取組を計画通り、実施している（<u>別紙資料1 参照</u>）。</li> <li>昨年度に検討し作成した味原アプローチカリキュラム「ハチララタイム」を第1学年で1学期に実施した。「幼小接続期におけるカリキュラム作成とその実際」について、5月11日に日本保育学会第78回全国大会（長野県立大学）で発表した（<u>別紙資料2 参照</u>）。また、味原小学校と味原幼稚園での実践を基に、「幼児～児童期における学びが自覚化する教師の働きかけ—ミラー型ライン図を用いた教師と子どもの対話分析をもとに—」をテーマに、5月12日に日本保育学会第78回全国大会（長野県立大学）で自主シンポジウムを行った（<u>別紙資料3 参照</u>）。両発表とも、全国の先生方から指導・助言をいただき、本校にとって有益な示唆を受けた。</li> <li>12月21日に中谷財団 2025年度科学教育振興助成成果発表会（東京工科大学蒲田キャンパス）で、本校の取組「幼児期の学びの芽生えを自覺的な学びへ転換する環境づくり」を全国に報告する予定である。</li> </ul>	B

**取組内容⑨【言語活動・理数教育の充実(思考力・判断力・表現力等の育成)】【「主体的・対話的で深い学び」の推進(個別支援の充実)】【全市共通テスト等の実施と分析・活用】**

- ・ 全学級で、必要に応じた重点的な指導や指導方法等の工夫をして「指導の個別化」を行ったり、一人一人に応じた学習活動・学習課題の提供をする時間を確保して「学習の個性化」を行ったりする。
- ・ 全学級で、多様な他者（同学級や同学年、異学年の児童、地域の人等）と協働する授業を行い、異なる考え方を組み合わせ、よりよい学びを生み出すことを目的とした「協働的な学び」を実現する。
- ・ 年1回、同学級以外の他者（同学年、異学年の児童、地域の人等）と協働する授業を行い、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出した事例を収集する。

**指標**

- ⑬ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか」の項目について、最も肯定的に答える児童の割合を40%以上とする。(本校 R6 学調 : 59.9%)
- ⑭ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」の項目について、最も肯定的に答える児童の割合を 60%以上とする。(本校 R6 学調 73.6%)
- ⑮ 小学校学力経年調査における、国語・算数・理科・社会・英語の平均正答率の対大阪市比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より0.01 ポイント向上させる。

A

**結果と分析**

- ・ 指標⑬に関する6月の結果は、69%であった。
- ・ 指標⑭に関する6月の結果は、75%であった。
- ・ 個に応じた学習活動・学習課題を提供する時間の確保や、複数人指導や放課後に少人数指導を、各学年行っていることが指標⑬⑭の達成要因と考えられる。
- ・ 指標⑮達成に向けて、現4~6年の全児童の昨年度の小学校学力経年調査における、国語・算数・理科・社会・英語の各教科の正答率に加え、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の各観点別正答率、「基礎」「活用」「記述」問題の各正答率の結果を分析した。教職員全員で、全児童の分析結果を共有した。児童一人一人の特性・学習進度・学習到達度などを分析した結果を活用して、学習内容の確実な定着に向けて必要に応じた重点的な指導、指導方法などを工夫して、指導の個別化を図る。一人一人に応じた学習活動・学習課題を提供し、児童自らが学習を調整していく学習の個性化を図る。具体的に、3~6年生対象に、11月10日、12日、19日、26日、12月1日の計5回、5年生対象に3学期に複数回、放課後時間を活用した個別支援の充実を図る取組を実施する予定である。
- ・ 理科学習において、全学級で、必要に応じた重点的な指導や指導方法等の工夫をして「指導の個別化」を行ったり、異なる考え方の組み合わせ、よりよい学びを生み出すことを目的とした「協働的な学び」を実現したりするために、「問題解決の力に焦点を当てた小学校理科における評価基準構築の試み～児童の記述分析を手がかりとして～」をテーマに研究を進めた。その成果と課題を8月24日

に日本理科教育学会全国大会（富山大学）で発表した（別紙資料4参照）。また、令和7年度大阪市「がんばる先生支援」研究支援に、本校の取組「理科の学びをつなぐ『評価基準と指導の手立て』の開発～『思考・判断・表現』の観点から見る第3～6学年の実態分析と系統的・発展的な指導～」が選定され、研究発表会・公開授業を8月29日に行った。北海道から沖縄県まで全国から理科に精通された先生方約70名が参加した（別紙資料5参照）。両発表とも、全国の先生方から指導・助言をいただき、本校にとって有益な示唆を受けた。

- ・ 本年度の研究教科である生活科・総合的な学習の時間を中心に、同学級以外の他者（同学年、異学年の児童、地域の人等）と協働する授業を行い、異なる考え方方が組み合わさり、よりよい学びを生み出した事例を収集している。

#### 取組内容⑩【英語教育の強化】

- ・ 小学校6年間を通して、英語モジュールや外国語活動、外国語の内容を系統立てた指導計画を作成し、児童の発達段階に応じた指導を行う。
- ・ 週3回は味原タイムで英語モジュールを全学級で行う。年間8回、英語集会を行う。

#### 指標

- ⑯ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を87%（昨年度86.9%）以上にする。  
⑰ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「外国語（英語）の授業で学習したことを使っていろいろな人と話をしたいと思いますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を84%（R6経年本校83.5%）以上にする。

#### 結果と分析

- ・ 指標⑯に関する6月の結果は、81%であった。
- ・ 指標⑰に関する6月の結果は、83%であった。
- ・ 指標⑯⑰に否定的に回答する児童が多かった高学年対象に、回答の理由を調査し、集約する。
- ・ 児童主体の活動を多く取り入れた授業改善を行う。具体的に、ペアワーク・グループワーク（授業で学んだことを児童同士で話し合う機会を増やす）、質疑応答練習（児童が相手に質問したり、相手の質問に答えたりする練習を多く取り入れる）、ロールプレイング（日常生活で使われるような様々な場面を設定し、児童がその役割になりきって英語で会話する）、発表・ディベート（自分の思いや考えを英語で発表したり、テーマについてディベートをしたりする機会を設ける）などが考えられる。また、児童全員が目標をもち、英語を使っていろいろな人と話す機会として、高学年中心に他校との英語交流を行う。
- ・ 会話の際、「間違えても大丈夫」な安心感をつくるようにする。正確な文法よりも「伝わった！」という成功体験を重視したり、間違えをすぐ直さず、まずは「good try!」と承認したりするようにする。

B

#### 取組内容⑪【体力・運動能力向上のための取組の推進】

- ・ 体育科における「体つくり運動」「器械運動」「陸上運動」「水泳」「ボール運動」「表現運動」のいずれの領域に苦手意識を持っているのか実態を把握し、授業改善を行う。
- ・ 4月の体力テストの記録を基に、10月の記録の目標を児童自らが設定するようになる。練習メニューを考えたり、計画的に取り組んだりして、体力・運動能力向上に向けて自己調整しながら取り組むことができるようになる。
- ・ 体力・運動能力向上に向けて、体育科の授業や休み時間に、なわとびやかけ

C

足、ボール投げ等の運動に取り組みやすいように、校内運動環境を整備する。

#### 指標

- ⑯ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合を72%（大阪市R7目標62.6%、昨年度71.5%）以上にする。
- ⑰ 体力テストの全種目において、4月に比べて10月の記録の方が良い児童の割合を56%（昨年度56.0%）以上にする。

#### 結果と分析

- ・ 指標⑯に関する6月の結果は、73%であった。
- ・ 指標⑯に否定的に回答する児童を対象に、回答の理由を調査し、集約する。あわせて、苦手意識をもつ体育領域（低学年：体つくりの運動遊び、器械・器具を使っての運動遊び、走・跳の運動遊び、水遊び、ゲーム、表現リズム遊び 中学年：体つくり運動、走・跳の運動、陸上運動、水泳運動、ボール運動、表現運動、保健 陸上運動、水泳運動、ゲーム、表現運動、保健 高学年：体つくり運動、器械運動、陸上運動、水泳運動、ボール運動、表現運動、保健）を調査し、回答結果を基に、以下の取組内容を検討する。
- ・ 11月に「運動好きになるぞ月間」を設定し、低中高学年別クラス対抗で玉入れや大玉遊び、大繩跳びなど（案）を行う。
- ・ 4月の体力テスト全種目の結果について、各学年の男女で、全国平均点数より2ポイント以下の人数と2ポイント以上の人数を数えた（別紙資料6参照）。その結果から、50m走と立ち幅跳びに特に課題があることがわかった。10月に「体力アップ月間」を設定し、体力サーキット（2分×4種目：立ち幅跳び、反復横跳び、ラダー、5mスタートダッシュ）約10分間を20分休みに講堂で行う。
- ・ 講堂ギャラリー一鉄柵に的としてのフラフープを設置したり、立ち幅跳びの記録がわかりやすいように10mずつテープを貼ったマットを用意したりするなど、環境を整備する。

#### 取組内容⑫【健康教育・食育の推進】

- ・ 学期に1回健康週間を設定し、全学年で出前授業を実施する。
- ・ 年に2回程度「食に関する指導」を実施する。
- ・ 全学級で、毎日の給食時間に給食献立を紹介する。

#### 指標

- ⑯ 校内児童アンケート調査(1月調査)で「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」に対して肯定的に回答する割合を77%（大阪市R5年度実績89.3%、本校R5年度83.0%）以上にする。
- ⑰ 年度末の校内調査において、「食に関する指導について適切な評価指標を設定し評価をしているか」に対して、肯定的に回答する教員の割合を100%（昨年度100%）とする。

B

#### 結果と分析

- ・ 指標⑯に関する6月の結果は、81%であり概ね達成しているが、低学年で目標数値を下回った。
- ・ 2学期健康週間は、1学期の結果を集計し、その内容（実態）を児童や保護者に周知するために、学年だよりを活用する。各学年の具体的な数字を公開することで、家庭への啓発、意識的に取り組む姿勢に繋げるようとする。規則正しい生活を送ることが難しい児童を毎月の生活指導委員会で把握する。各家庭の事情や

生活環境の違いなどが要因として考えられるため、担任だけでなく教職員全員で個に応じた改善策を考え、実行する。

- ・保護者を対象とした啓発活動として、2学期に「規則正しい生活（インターネット、テレビ（ネット配信）、ゲームなどの時間を見直すことも含む）」についての学習参観を全学級で行う。また、3学期に実施する、学校医や外部講師を招く学校保健委員会「快眠セミナー」を全学年の保護者対象（昨年度は6年生の保護者のみ）として、参加を募る。
- ・校内児童アンケート調査（6月実施）の「食べることに関する学習に興味を持っていますか」の項目について、肯定的に回答した児童の割合は、83%であった。計画的に「食に関する指導」を進めていること（別紙資料7参照）と、全学級で毎日の給食時間に給食献立を紹介していること（下図）が影響していると考えられる。



毎日の給食時間に給食献立（パワーポイントでのスライドショー）を全学級で紹介している様子

## (様式2)

## 大阪市立味原小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準 A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標の達成に向けた取組内容、目標の達成状況を測る指標、結果と分析	達成状況
<p><b>【学びを支える教育環境の充実】</b></p> <p>⑤ 授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の75%（大阪市R7目標75%、本校昨年度42.0%）以上にする。（ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日数を除く）</p> <p>⑥ 第2期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準1（時間外勤務時間が45時間を超える月数0、かつ、1年間の時間外勤務時間が360時間以下）を満たす教職員の割合を56.4%（大阪市R7目標56.4%、R6本校87.5%）以上にする。</p>	A

年度目標の達成に向けた取組内容(上段) 目標の達成状況を測る指標(中段) 現時点での結果と分析(下段)	達成状況
<p><b>取組内容⑬【ICTを活用した教育の推進】【データ等の根拠に基づく施策の推進】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>毎日の「心の天気」入力（登校時・下校前）や「学びの天気」入力（授業後）、毎日の連絡帳の配信、学期に1回以上の「いじめアンケート」の実施を学習用端末で行う。</li> <li>1学期中に、全学年でオンライン学習を行う。学習欠席児童へのオンライン学習など、全児童の学習保障を行う。</li> <li>SKYMENUやデジタルドリル(navimaを含む)を活用し、学習履歴や学習行動記録等のデータを集積し、各児童、各学級、各学年のデータ変化を分析し、指導に生かす。</li> </ul>	
<p><b>指標</b></p> <p>⑫ 校内児童アンケート調査(1月調査)の「PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」の項目について、ほぼ毎日と答える児童の割合を75%以上とする。(R6学調：75.0%)</p>	C
<p><b>結果と分析</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>指標⑫に関する6月の結果は、62%であり、目標値には達していない。</li> <li>「心の天気」利用率は学年によってばらつきがみられ、特に高学年の利用率が低くなっている。</li> <li>「心の天気」利用率は日によってばらつきが見られる。利用をさらに徹底させるため、毎週skipで利用率を確認し、それを全教職員に共有できるようにする。また、発達段階や学年、クラスの状況に応じて個別に声をかけたり、一斉に入力する時間を設けたり「タブレットを使って学習する時間」が一目でわかるような視覚的な支援をしたりして、教職員や児童が学習者用端末を使う意識を高められるようにする。学習用端末を自宅に忘れた児童や登校が遅めの児童は入力が</li> </ul>	

難しいため、個別の支援を要する。

- ・ 学期に 1 回、「いじめアンケート」を学習用端末で行った。
- ・ 1 学期は 2 ~ 6 年生で、2 学期以降は全学年で「学校アンケート」学習者用端末で行った。
- ・ 1 学期の早い時期（5 月 2 日）に、全学年で放課後オンライン授業を行い、動作確認も行った。
- ・ 学習欠席児童へのオンライン学習を積極的に行った。全学年で徹底するようとする。
- ・ SKYMENU やデジタルドリルを授業や長期休業中などで活用した。学習履歴や学習行動の記録などのデータを集積し、個に応じた支援を考え、実施している。
- ・ 授業日において、児童の 8 割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日（ただし、事務局が定める学校行事等 ICT 活用が適さない日数を除く）の 5 月 86.6% (78.4)、6 月 86.2% (74.6)、7 月 88.5% (76.7) だった。（目標：75% 以上）だった。連絡帳の内容を「まなびのポータル」の「お知らせ管理機能」を活用して配信したり、「SKYMENU」や「デジタルドリル」を積極的に活用したりする必要がある。また、teams を活用して授業をするなど、使用率向上に向けた工夫が必要である。学習者用端末をいつもそばに置いて、すぐに「まなびの天気」などを入力できる環境を整える。スクールライフノートの時間割機能を活用できるようにする。

#### 取組内容⑭【働き方改革の推進】

- ・ SKIP 連絡掲示板を効果的に活用したり、企画・立案・実施する際は、起案者が事前に意見を集約し、起案書を作成して、各校務分掌の部長、教頭、校長の決裁を得た後、実施するという形式（決裁制）を導入したりすることで、教職員全員出席の会議回数の削減、会議時間を短縮する。
- ・ 教職員全員出席の会議の際は、時程を計画案で知らせる。
- ・ 会議等の書類を電子化して配付したり、保護者配付の手紙をミマモルメで配信したりして、ペーパーレス化を進める。
- ・ 毎週水曜日にノー残業デー（全教職員 17:30 退勤）、月 1 回ゆとりの日（放課後に会議を入れない日）を設定する。

#### 指標

- ㉓ 第 2 期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準 2（1 年間の時間外勤務時間が 720 時間以下、時間外勤務時間が 45 時間を超える月数 6 以下、時間外勤務時間が 100 時間を超える月数 0、直近 2 ~ 6 か月の時間外勤務時間の平均が 80 時間を超える月 0、すべて）を満たす教職員の割合を 100%（R7 大阪市目標 84.9%、R6 本校 100%）とする。

A

#### 結果と分析

- ・ 8 までの結果は、基準 2（1 年間の時間外勤務時間が 720 時間以下、時間外勤務時間が 45 時間を超える月数 6 以下、時間外勤務時間が 100 時間を超える月数 0、直近 2 ~ 6 か月の時間外勤務時間の平均が 80 時間を超える月 0、すべて）を満たす教職員の割合は 100% だったことから、計画通り進んでいる。
- ・ 昨年度までに、教職員全員出席の会議回数や会議時間を 25% 削減しており、今年度もそれを厳守している。
- ・ 10 月より学校配布の手紙を基本的にミマモルメでの配信に移行した。
- ・ 職員室の事務机・椅子を撤去し、打ち合わせや作業をしやすい環境に整えるこ

とで業務の効率化を図った。(資料8参照)

#### 取組内容⑮【教員の資質向上・人材の確保】

- ・ 食物アレルギー研修やエピペン研修、普通救命講習、各教科教育研修、特別支援教育研修、hyper-QU を活用した児童理解研修など、教員の資質向上に関する研修を企画・運営を行う。
- ・ 若手教員を中心とする若手教員指導力推進委員会を設置する。推進委員会のメンバーが学びたいことを中心としたメンター研修（推進委員会）を月1回以上、企画・実施する。
- ・ 教員の授業力向上を目指した、各教科領域等の研修を学期に1回以上企画・実施する。

#### 指標

- ㉔ 年度末の校内調査において、「研修で得た知識や気づきを、今後に活かすことができそうと思いますか」に対して、肯定的に回答する教員の割合を 100%（昨年度 97%）とする。

B

#### 結果と分析

- ・ 教育DXの推進研修(4月2日)食物アレルギー研修(4月7日) やエピペン研修(4月7日)、普通救命講習(6月13日)、特別支援教育研修(児童理解研修5月12日)、いじめについての研修(7月17日) 人権研修(LGBTQ+研修 10月10日)など、教員の資質向上に関する研修を行っている。
- ・ メンター研修（推進委員会）を月1回以上（現時点で7回）実施している。内容は、「4月の学級経営と参観・懇談」、「初任者・教員として」、「授業持ち寄り話そう会①②」、「成績のつけ方・観点」、「1学期を振り返って」、「生活・総合的な学習の時間の極意」などである。
- ・ 外国語研修(5月14日・6月4日)、英語モジュール公開授業(10月3日)、国際理解教育公開授業(11月12日予定)、体育科公開授業(11月28日予定)など教員の授業力向上につながる研修の場を設定している。

#### 取組内容⑯【カリキュラム・マネジメントの推進】

- ・ 年度当初に全学年の全教科・領域の年間指導計画を作成する。それを基に、年間を通して実施し、成果と課題をまとめる。年度末に、カリキュラム・マネジメント部会を行い、各学年で実施した年間指導計画の成果と課題を全教職員で共有し、年間指導計画の改善を行う。

#### 指標

- ㉕ 年度末の校内調査において、「指導計画の作成に当たっては、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していますか」に対して、最も肯定的な「よくしている」と回答する教員の割合を 35% (大阪市 R7 目標 35%、本校 R6 年度 10.0%) 以上とする。

B

#### 結果と分析

- ・ 前期時間割終了前に、年度当初に作成したカリキュラム・マネジメントの修正を全学年で行う。具体的に、関連が強い教科・領域の学習同士は矢印でつなげ、

矢印の太さで関連度を表したり、引継ぎ事項（1・2学期）を記入したりする。

### 取組内容⑰【「大阪市子ども読書活動推進計画」に基づいた取組】【学校図書館の活性化】

- ・ 貸し出し1回につき、2冊（令和6年度は1冊）までとする。保護者への図書の貸し出しができることをアナウンスすることで、親子での読書を推進する。
- ・ 季節や各学年の学習内容に応じて、学校図書館の本の展示の仕方を工夫する。
- ・ 毎週火曜日の8:30～8:45に読書タイムを設定する。
- ・ 週3回、図書委員会を中心に、おすすめの本を紹介するなど、読書活動推進を行う。
- ・ 本の貸し借りをデータ化し、全児童の貸し借りの進捗状況を把握し、個に応じて支援する。
- ・ 読書週間を設定したり、大阪市立天王寺図書館と連携して「おはなし会（読み聞かせ）」を全学級で開催したりする。
- ・ 大阪市立図書館による団体貸出を利用し、調べ学習への支援を行う。
- ・ PTA図書委員の保護者と連携しながら、読書活動推進を行う。

#### 指標

- ⑯ 校内児童アンケート調査(1月調査)の「読書は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を82%（大阪市R7目標76.5%、本校R6年度81.7%）以上とする。
- ⑰ 校内児童アンケート調査(1月調査)の「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）」に対して、「読書を全くしない」と回答する児童の割合を13%（大阪市R7目標23.5%、本校R6年度13.7%）以下とする。

C

#### 結果と分析

- ・ 指標⑯に関する6月の結果は、83%となり概ね達成しているが学年により差がみられた。
- ・ 指標⑰に関する6月の結果は、18%であった。この結果を受けアンケート結果を個別に把握し、担任より読書を促す働きかけを行う（例：おすすめの本の紹介など）。また、読書週間には「うちどく強化月間」とし、週1回は宿題のひとつとして最低10分間（学年の発達段階にあわせて）家庭読書を取り入れる。
- ・ 図書室の時間割や休み時間の図書室開放を全学級に割り当てたり、朝の読書タイム（毎週火曜日）を設定し、その時間には音楽を流すことで読書に適した環境を作れるようにしたりした。11月10日から21日に読書週間を設定し、図書委員会中心に読書に関するイベントを行う。また、家庭で読んだ本（ページ数）を「うちどくカード」に記録する取組を行うなど、読書活動の推進を行う。天王寺図書館との連携を図り、学級文庫用の図書や調べ学習の図書を借りたり、読書ボランティアによる「おはなし会」を11月7日に行ったりする予定である。
- ・ 今年度より貸し出し1回につき、2冊まで借りることができるようにして学級や家庭での読書推進を図った。また、保護者も借りることができる（PTA図書）ことをアナウンスして親子ともに読書の機会を増やしたりするようとする。

- ・ 7月に学校図書の蔵書点検を行うとともに学級文庫の入れ替えを行った。状態のよい本を並べることで読書意欲を高められるようにした。

#### **取組内容⑯【教育コミュニティづくりの推進】【地域学校協働活動の推進】**

- ・ 学校と PTA 役員・実行委員で、昨年度の PTA 常置委員会の活動を振り返り、各委員会の活動内容を見直し、修正する。年度末に、各委員会の成果と課題を共有する。
- ・ 運動会、作品展、清掃活動等の学校行事や、芝生除草作業、芝生開放デー、地域花見の会、防災フェスタ、もちつき大会、ボッチャ大会などの地域行事を学校と保護者、地域と連携しながら実施する。その様子を、学校ホームページやはぐくみネット「味原っ子 NOW」や緑化推進（芝生化）事業広報誌などで伝える。

#### **指標**

- ㉙ 年度末の校内調査において、「地域学校協働本部やコミュニティ・スクールなどの仕組みを生かして、学校の美化、登下校の見守り、学習・部活動支援、放課後支援、学校行事の運営など、保護者や地域の人との協働による活動を行いましたか」に対して、肯定的に回答する教員の割合を 100%（大阪市 R7 目標 85%、本校 R6 年度 100%）とする。

B

#### **結果と分析**

- ・ 運動会 6月 8 日、PTA 芝生作業（除草作業 5月 7 日、芝刈り作業 9月 17/18/19 日）、PTA 体育厚生委員「普通救命講習」6月 13 日、PTA 図書委員による「図書館開放」（毎月最終木曜の 15 分休み）、PTA 学級委員「学級懇談会」9月 19 日、PTA 保健給食・環境委員「給食試食会」10月 2 日、味原防災フェスタ 11月 1 日（予定）、学習発表会 11月 15 日（予定）、芝生開放デー 11月 15 日（予定）、もちつき大会 12月 6 日（予定）、ボッチャ大会（予定）を実施した。随時、学校ホームページやはぐくみネット「味原っ子 NOW」、緑化推進（芝生化）事業広報誌「芝生ニュース」でその様子を伝えた。また、今年度の PTA 活動について、PTA 広報委員と教職員で、PTA 広報誌「あじはら」を作成し、3月に配布予定。

資料 1

## 令和7年度 「味原小学校・味原幼稚園・味原保育所」保幼小接続活動計画

### 1. 目 的【就学前教育カリキュラム等に基づいた教育の推進】

- ・味原小学校、味原幼稚園、味原保育所と連携し、幼小接続の取組を推進する。

### 2. 計 画

	時期	(対象) 活動名	ねらい	活動内容	結果・課題
1 学 期	6月2日 (月) 3限	(幼・保・小) 小学校で、運動会の演技披露、競技を楽しむ	・5歳児、低学年(1・2年生)の演技を見て、それぞれの発見や工夫に興味をもつ。 ・5歳児と低学年(1・2年生)が互いに興味をもち、一緒に遊ぶことを喜ぶ。	・低学年(1・2年生)が、運動会で披露する演技を5歳児に見せる。 ・競技(玉入れ)を5歳児と1年生が一緒に行う。	味原幼稚園5歳児16名、味原保育所5歳児21名参加
	7月1日 (火) 昼休み	(幼・保・小) スマイルタイムで笹飾りを作ること	・5歳児と小学生が互いに興味をもち、一緒に活動することを喜ぶ。 ・5歳児、小学生それぞれの活動や発見、工夫に興味をもつ。	・たてわり班に、5歳児も加わり、合同で七夕の笹飾りを作る。 3階の4班は味原幼稚園 4階の5班は味原保育所	味原幼稚園5歳児16名、味原保育所5歳児21名参加
	7月上旬	(幼) 小学校に七夕の笹を届ける	・小学生の作品を見て、発見や工夫に興味をもつ。	・幼稚園で飾り付けた笹を届ける。 ・小学生がつくった笹飾りを見る。	7月2日(水)13:15頃、味原幼稚園5歳児が届けに来る
	7月上旬	(保・幼) プール参観	・5歳児が小学校の生活を知り、小学生への憧れや期待をもつ。	・水泳の学習の様子を、保育所、幼稚園の園児が参観する。	7月7日(月)10:00頃、味原保育所5歳児が1・2年生の水泳の様子を見学に来る
2 学 期	10月	(保) 避難訓練	・保育所の園児が小学校へ避難しに来る。		
	11月上旬	(保・幼)	・小学生の発表の様子を見て、発見や工	・小学校の学習発表会を鑑賞する。	

		小学校の学習発表会を鑑賞する。	夫に興味をもつ。		
	11月下旬 5限	(幼・小) 幼稚園の作品展を鑑賞する。	・園児の作品を見て、発見や工夫に興味をもつ。	・1年生が幼稚園の作品展を鑑賞する。	
3 学 期	2月下旬	(幼・小) 学校探検	・5歳児が小学校の生活を知り、小学生への憧れや期待をもつ。 ・1年生が5歳児に対してリーダーシップを發揮する。	・5歳児と1年生で学校探検を行う。	
	3月	(幼・保) 学校見学	・5歳児が小学校の生活を知り、小学生への憧れや期待をもつ。	・5歳児が授業や給食の様子を見学する。	
通年	通年	(幼・保) 小学校の芝生、校庭で遊ぶ	・広い芝生の校庭の心地よさを味わったり、小学校への親しみや期待をもったりする。 ・小学校の施設に興味をもつ。	・3・4・5歳児が小学校校庭(芝生)で遊ぶ。 ・3・4・5歳児が小学校の遊具や自然物に興味をもつ。	
教 職 員	通年	(幼・小) 授業や保育、行事、施設を見学する	・授業や保育の取り組みについて学び、互いの教育内容の理解を深める。	・互いの校園内研究会に参加し、学び合う。味原小学校公開授業日は幼稚園、保育所とともに5月に連絡済み(別紙参照)。6月13日(金)味原幼稚園公開保育 ・行事、施設を見学する。	
	4月14日 15:00~16:00	(幼・小) 年間計画作成	・1・2年生活科年間指導計画、5歳児年間保育計画と一緒に考える。	・どんな遊び・学びが考えられるかを検討する。	実施 幼小接続部メンバー、味原幼稚園3名参加

	7月下旬	(幼・小) ドキュメンテーション比べ	・共通の対象物「水と土」に5歳児、1年生がどのような遊び・学びを展開するか共通点・差異点を探る。	・「水と土」を対象に、5歳児と1年生がそれぞれどのような遊び・学びを展開したかをドキュメンテーションにまとめる。成果物のドキュメンテーションを比較する。	味原小学校 1-1…7月7日(月)1限、8日(火)1限、1-2…7月14日(月)1限、15日(火)1限に実施。 幼小接続部会 7月16日(水)15:00～16:00
	7月下旬	(幼・小)「ハチララタイム (味原 スタートカリキュラム)」実践 の振り返り	・「ハチララタイム」の成果と課題を共有する。	・「ハチララタイム」の成果と課題を話し合い、加筆・修正を行う。	幼小接続部会 7月16日(水)15:00～16:00
	9月1日 (月)	(幼・小) 授業づくり	・授業づくりと一緒に考える。	・1年公開授業の指導案検討会と一緒にを行う。	実施 味原小学校研究推進委員会メンバー、味原幼稚園1名参加
	10月8日 (水)	(幼・小) 授業づくり	・授業づくりと一緒に考える。	・2年公開授業の指導案検討会と一緒にを行う。	
	11月下旬	(幼・小) 幼稚園の作品展 を鑑賞する。	・園児の作品を見て、発見や工夫に興味をもつ。	・職員が幼稚園の作品展を鑑賞する。	
	12月中旬」	(幼・小) 活動のリフレク	・2学期実践の振り返りをもとに、幼小での遊び・学びの共通点・差異点を考え	・2学期実践の振り返りを行う。	

		ション	る。		
12月21日 (日)	(幼・小) 成果発表	・成果報告を全国に発信する。		中谷財団成果報告会	
3月上旬	(幼・小) カリキュラムづくり	・R8年度版スタート・アプローチカリキュラムの作成	・R7年度版をもとに、加筆・修正を行う。		

## 資料2

日本保育学会第78回大会

C000593

# 幼小接続期におけるカリキュラム作成とその実際

坂田 鈴子((株)ボーネルンド 元大阪市立東桃谷小学校)

岩本 哲也(大阪市立味原小学校) 三宅理恵(大阪市立味原幼稚園)

溝邊和成(九州共立大学)

大久保舞(大阪市立東中川小学校)

## 1. 研究の背景と目的

現在、「[今令和の日本型学校教育]」の構築を目指して個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(中教審答申2021)」の具体化とともに、幼小接続の充実に向けた「策け横プログラム(2022)」の試行実験が推進している。これを受け、小学校側で作成される「スタートカリキュラム」に対し、幼稚園側も子どもたちの小学校への円滑な移行遂行を目的に「アプローチカリキュラム」の作成が進められている。「スタートカリキュラム」や「アプローチカリキュラム」に焦点を当てた先行研究において内容に深まりが見られる一方で、藤谷(2022)等が示しているように、その作成方法や実施においては課題が見られる。幼児期と児童期の教育活動は、双方の教育活動のつながりを見通しつつ、「幼児期の終わりまでに育つてほしい姿」を活用して学びをつけ、教科等における学習へと発展させることが必要である。そのために、連携・接続の体制を作り、課題を共有し、接続を意識した教育課程の編成・実施を行なうが難航を深めていくことが求められている。しかしながら、多くの場合、授業の異なる教員が協働して実践的なカリキュラムを作成することに困難さが伴う。

そこで本報告では、小学校教員と保育者が協働して幼小接続期のカリキュラムを作成・実施できるように、接続期(5歳児後半から小学校1年生の初期)に焦点を当て、モデルカリキュラム作成のポイント(試案)を示すこととした。

## 2. カリキュラム作成の工夫

### ポイント1:6領域の設定

接続カリキュラムにとって重要視される点が、領域の編成である。特に幼児期の領域を踏まえることが求められる。

参考の1点目として、幼稚園教育要領が挙げられる。現行の保育内容は、5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」編成であるが、1989(平成元)年の改訂前では、小学校教育を意識した6領域「健康」「社会」「自然」「書類」「音楽リズム」「絵画製作」であった点である。

参考の2点目は、最近注目されているアメリカのHighScopeカリキュラムである。砂上ら(2020)によると、「Key Development Indicators(KDIs:重要発達指標)」と呼ばれる「学びへのアプローチ」「社会的・情動的な発達」「心身の発達と健康」「言葉、読み書き、コミュニケーション」「算数」「創造的な芸術」「科学技術」「社会的な知識の獲得」の8つの領域から、幼児期における子どもの発達を捉えている。こうした区分が注目に値する。これらのアイデアを参考につつ、対象とする幼稚園と小学校の実態を踏まえ、接続期の学習を学びの対象ごとに整理し、「言葉」「自然」「学校・地域」「造形」「音楽」「健康」の6区分に分類することとした(図1)。

年齢	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳
年齢	1-2歳	3-4歳	5-6歳	7-8歳	9-10歳	11-12歳	13-14歳	15-16歳	17-18歳	19-20歳	21-22歳	23-24歳
段階	段階A	段階B	段階C	段階D	段階E	段階F	段階G	段階H	段階I	段階J	段階K	段階L
年齢	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳
段階	段階A	段階B	段階C	段階D	段階E	段階F	段階G	段階H	段階I	段階J	段階K	段階L

図1 A小学校スタートカリキュラム(1学期)学習デザイン案

### (1) 保育者に期待される効果(単元「はじめのいっぽ」より)

本単元は、入学後すぐの内容となる。入学前に好きだったことや、経験したことなどを思い出したり、伝え合ったりして、小学校生活を取り組んでみたいことを考えたり、伝え合ったりして、期待と安心をもって小学校生活を過ごすことができるようになることがねらいである。具体的には、図2で示したように幼児教育にもつながりやすい内容が含まれる。このような内容を見通すことで、保育者は、鉛筆やノートを使ってごっこ遊びをしたり、3-4歳児や地域の人々に伝える活動を取り入れたりする中で、「社会生活との関わり」「数量や图形、操作や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」などに関する「学びの芽生え」がより一層育まれるよう意識して関わることができると考えられる。

### (2) 小学校教員に期待される効果(単元「わくわく どきどき しょうがっこう」より)

幼児教育を通して、「社会生活との関わり」「道徳性・規範意識の芽生え」「言葉による伝え合い」などの資質・能力が育まれ、入学してきている。それらを踏まえ、小学校での本単元では、学校や通学路を探検する活動を通して、学校の様子や学校生活を支えている人々や友だち、通学路の様子やその安全を守ってくれている人々がいることに気付き、学校生活は様々な人や施設と関わっていること、きまりやマナーを守ること、気持ちよく過ごせることがわかり、楽しく安心して学校生活を送ったり、安全な登下校をしたりできるようにすることがねらいである。このようなねらいを踏まえ、ハチララタイムとして

### ポイント2:「〇〇ララタイム(仮称)」の設定

本カリキュラムの実施を想定する小学校は、「3学期/年」制である。その実態を踏まえ、スタートカリキュラムを入学初期のみとするのではなく、幼児期の学びを十分に發揮しながら、継続的な移行が可能となるよう1学期の学習内容全てを複合・横断的に捉え、「〇〇ララタイム」と設定した(図1)。

### ポイント3:学習内容で表記

小学校の年間指導計画では、単元名が表記されているものが一般的である。一方で、幼稚園の教育課程には内容が具体的に記載されている。小学校教員と保育者が、相互の教育内容や教育方法を共有し、充実を図ることができるようにするため、単元名ではなく、具体的な内容での文章表記を採用した。

さらに、共有可能となる電子データには、複合・横断的に捉えた大きな活動名を選択すると、その教育内容に位置づけた教科・単元名が表示されるようにした(図2)。

はじめての「いっぽ」	次へ(現在・手順をきくこと)(次へ)
対話などして、小学校でやったみたいことを話を聞く(ほほのいのいっか)生活	1
かわいい小学校生活の感動を語らませてくりたのいしちゅうこじ(感動)	2
乗り物の名前をあひだらけする(「ぎこちないよ」国語)	3
乗り物を楽しむ(「よろこくね」国語)	4
ひらがな「もしもかく」(国語)	5
おもちゃ屋の店員の方を持る(「たのしくかくこう」国語)	6
運転するときの運転台口の動作を知る(「ひらうひあひわいのほどうらかな」運動)	7
机や椅子の開け閉めをする(「ひらひらとくとくとく」運動)	8
おもちゃの車について走る(「ふたりのゆう」運動)	9
気持ちのよい後悔を考える(「あいさつきのあるいにち」国語)	10
判断して正しいことを選ぶする(「はなしをしているのか」国語)	11
きまりを守らう(「どうぞ」国語)	12
車両運搬、鉄棒を使った運動遊び(体育)	13
鉛筆、さみがよ(算数)	14
砂や土でつくる(「すなやつとなかよ」国工)	15

図2 スタートカリキュラム(仮称)

複合・横断的に捉えた単元「わくわく どきどき しょうがっこう」を構成すると、表1のような内容を含むことができると考えられる。

表1に示すように、具体的な活動とそれに対応する教科等名が明確にされている点から、小学校教員は、どのような内容と配列を組めばよいか、並行して進めたり、横断する内容の見極めや指導・評価のポイントなどが予想しやすくなったりすると考えられる。

表1 考えられる単元内容と対応教科等名

・学校探偵、楽しい学校生活、安全な登下校(「わくわく どきどき しょうがっこう」生活)
・学校生活を支えてくれる人に感謝する(「はいさつき」道徳)
・場面に応じた声の大きさ(「こえをとけてけう」国語)
・人と関わることの楽しみを修得する(「なんていうかの」国語)
・読み聞かせ、学校図書館(「ほんがたさん」とよかんはどんなところ)国語)
・構成玉(「ふたりのゆう」運動)
・気持ちのよい後悔を考える(「あいさつきのあるいにち」国語)
・判断して正しいことを選ぶする(「はなしをしているのか」国語)
・きまりを守らう(「どうぞ」国語)
・車両運搬、鉄棒を使った運動遊び(体育)
・鉛筆、さみがよ(算数)
・砂や土でつくる(「すなやつとなかよ」国工)

### ポイント3:カリキュラム点検法の確立

保育者と小学校教員双方参加によるカリキュラム改善に関する意見交流を行う。特に、環境構成や教材の工夫等も含むカリキュラムの実践上の点検法の確認と理解を共有を図り、カリキュラムマネジメント力の育成につなぐ。

### 引用・参考資料

\*1 藤谷智子(2022)幼小接続から接続カリキュラム創造への挑戦と課題～各論～心理の観点から、筑波大学女子学部教育学研究会集第1号

\*2 砂上美子・中道圭人・入澤真一・小林直美(2020) HighScopeカリキュラムの特徴と日本の幼児教育への影響—2019年アメリカHighScope等認可施設の現状を中心として—、千葉大学教育学部研究紀要 第58号、171-183。

## 3. 今後の課題

### ポイント1:カリキュラム前後の検討

本カリキュラムが実際に採用する際には、当然のことながら、5歳児V期の準備を通じた子どもの姿が重要視される。具体的な子どもの様相が反映されたカリキュラム[V期]の検討も肝要である。また、本カリキュラム終了後の従来の小学校低学年カリキュラムの編成(教科横断型・総合型)にも言及する必要がある。

### ポイント2:子どもの姿を反映

子どものポートフォリオを確かに受け止め、子どもの発言や行動等を学びの時系列としてカリキュラム表記に活用する。

### ポイント3:カリキュラム点検法の確立

保育者と小学校教員双方参加によるカリキュラム改善に関する意見交流を行う。特に、環境構成や教材の工夫等も含むカリキュラムの実践上の点検法の確認と理解を共有を図り、カリキュラムマネジメント力の育成につなぐ。

### 引用・参考資料

\*1 藤谷智子(2022)幼小接続から接続カリキュラム創造への挑戦と課題～各論～心理の観点から、筑波大学女子学部教育学研究会集第1号

\*2 砂上美子・中道圭人・入澤真一・小林直美(2020) HighScopeカリキュラムの特徴と日本の幼児教育への影響—2019年アメリカHighScope等認可施設の現状を中心として—、千葉大学教育学部研究紀要 第58号、171-183。

### 資料3

## 幼児～児童期における学びが自覚化する教師の働きかけ —ミラー型ライン図を用いた教師と子どもの対話分析をもとに—

企画・司会者 溝邊和成（九州共立大学）  
話題提供者 岩本哲也（大阪市立味原小学校） 三宅理恵（大阪市立味原幼稚園）

#### 【研究目的と企画意図】

現在、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（中教審答申2021）の具体化とともに、幼保小接続の充実に向けた「架け橋プログラム（2022）」の試行実践が継続している。幼児～児童期の学びの連続性を支援する環境づくりの中で、いかに個別最適で協働的な学びを実現させていくかについては、実践現場に見られる差し迫った課題といえる。特に、この時期に見られる「学びの芽生え」がどのように「自覚化された学び」として成立していくのかについて、直接的な環境要素となる教師の働きかけ等を含めた実践的検討が不可欠である。

そこで、教師（幼稚園・小学校）を対象として、教師の教育的働きかけと子どもの反応（学びの形成）プロセスを事例的に追いかけて、その類型化をゴールとする研究プロジェクトの一役を本研究に定めた。

#### 【関連する先行研究】

目立たせる（marking）、復唱する（revoicing）など Palincsar, S. (2003) のアイデアから、黒田・森本（2010, 2016）は、小学校理科における談話分析に着目している。それらを基に松村・中城（2021）、岩本ら（2024）は、教師の働きかけとしてタイプ別細分化を提案している。また流田・岩本（2024）は保育場面で身体操作を含む4観点（声かけ、身振り、立ち位置、物への働きかけ）を借定し、分類を試みている。さらに5歳児・小学校1年生の合同活動における教師の働きかけも報告され（岩本・流田 2024）、本研究の準備となっている。

#### 【調査方法】

データ収集：調査の実施日時・場所、調査対象等は、話題提供1・2内で述べる。

分析方法：教師の働きかけと子どもの反応のデータ分析については、上述の先行研究等を参考に、そのプロセスが時系列を踏まえて視覚的にもわかりやすい図（ミラーライン図）を試作し、活用する（図1）。活用手順は、時系列に従って、録画データより行動・文意を損なわな

いようにA・Bの欄に記録する。それらを教師側・子ども側それぞれのa～eに○印で分類・位置付けた後、関係を示す矢印を付す。このような作業を基本原則として図を完成させた後、教師と子どもの双方の行為・発言の連続性、および自覚化（気付きを活かして行動する等）の様相を抽出・確認の上、パターン化の可能性を検討した。

#### 【倫理的配慮】

本研究にかかる2つの調査研究（話題提供1・2）においては、日本保育学会倫理綱領を遵守し、対象となる園及び小学校、保育者、指導者に、研究趣旨、調査結果の活用、個人情報保護等に関して事前説明を行い、了解を得ている。

（参考文献略）（溝邊和成）

#### 【話題提供1】幼稚園教諭の働きかけと子どもの変容

（三宅理恵）

<調査日時：2024年11月／場所：A幼稚園の近くにある公園／対象：5歳児>

調査の分析を進めると、幼稚園教諭の働きかけについて、次のような傾向が見えた。子どもの学びが自覚化につながる場合には、教師の働きかけ（表現させる：多答型）→子どもの反応（表現する：返答）→教師の働きかけ（目立たせる：声かけ、復唱する）という、言葉の連続性が表れていた。例えば、子どもが木と木をたたき、音を出しながら遊び、その音を教師に聞かせる場面において、教師が「いい音なったね、どんな音？」（表現させる：多答型）と聞くと、子どもが「タンバリンの音みたい」（表現する：返答）と答える。その返答を聞いて、教師が「タンバリンの音みたい！」（復唱する）と子どもの前で話す。このように、やりとりの最後には、教師が子どもの言葉を復唱したり、「本当だね」などの言葉で目立たせたりすることにより、子どもの学びの了解点となる。子どもは了解点を見つけると、次の活動へと向かっていく。これは、学びの自覚化へとつながっている姿と言える。

また、教師からの働きかけを受けた子どもの反応が、態度や行動で表す時もある。その時には、教師が子どもの実態に応じた働きかけに変化を加え、教師の働きかけ（表現させる：多答型）→子どもの反応（強調：身振り）→教師の働きかけ（目立たせる：声かけ、もどす：確認型）という動きの連続性が見られた。例えば、子どもが自分で見つけたお気に入りの葉を、教師と共に色分けし、それを教師が持っているタブレットで撮影して遊んでいる場面において、教師が「どうやって置くといいんだろう」（表現させる：多答型）と聞くと、子どもは悩んだ末、2色の中間に無言で葉を置く（強調：身振り）。教師は「真ん中に置く？両方たよって？」（もどす：確認型）と言葉がけると、子どもは「うん」（表現する：返答）と答える。そこに教師が「なるほど」（目立たせる：声かけ）と言葉かける。

このように、子どもが言葉ではなく、身振りで学びを

T	教師						子ども								
	A	B	a	b	c	d	e	f	f	c	d	a	b	a	B
			○												
				○											
					○										
						○									
							○								
								○							

△印：関係（流れ）、○印：発言の分類箇所 T:時間 A:行動 B:発言  
教師側：・・a:目立たせる（声かけ、身振り、立ち位置、物への働きかけ）、b:もどす（強調、連続、再考、切り返し、懇意）、c:復唱する（表現させる（一答、多答）、依頼、発見、選択）、d:付け加える（まとめる子ども側：・・a:強調（声、身振り）、b:もどす（強調、連続、再考、切り返し、懇意）、c:復唱する（表現する（返答、依頼、発見、選択）、d:付け加える（まとめる

図1 ミラー型ライン図（概略）

示した時には、教師が十分な時間をとったり、代弁し、言葉で返したりしながら、子どもの学びを確認することにより、学びを自覚化できるように導いている。

以上のように、幼稚園教諭の働きかけには、①教師の働きかけ(表現させる:多答型)→子どもの反応(表現する:返答)→教師の働きかけ(目立たせる:声かけ・復唱する)、②教師の働きかけ(表現させる:多答型)→子どもの反応(強調:身振り)→教師の働きかけ(目立たせる:声かけ・もどす:確認型)、という2つのパターンが見られることが分かった。子どもの実態により、それ以外の働きかけの連続性も予想されることから、今後も更なる事例の集積・分析を重ねる予定である。

#### 【話題提供2】小学校教諭の働きかけと子どもの変容

(岩本哲也)

<調査日時: 2024年11月／場所: B小学校の近くにある公園／対象: 第1学年児童>

小学校教諭Hと子どもの行為・発言をミラー型ライン図にまとめ、その中から教師と子どもの双方の行為・発言の連続性、および自覚化の様相として7事例を抽出した。学びの自覚化につながるきっかけとなる教師の働きかけを「提案型」「受け入れ型」とし、自覚化の様相が見られるまでに働きかけた子どもの人数(個人・集団)で分類した。教師が子どもに「～してみよう」「～するはどう?」と発言したり、提案したいことを行動で示したりすることきっかけに、子どもの学びの自覚化につながった事例を「提案型」とした。子どもに「どうしたい?」「それいいね」と発言したり、子どもの行動を真似したりすることきっかけに自覚化が進んだパターンを「受け入れ型」とした。

その結果、4つに整理・分類することができた(表1)。

表1 小学校教諭の働きかけパターン

教師の働きかけ	子ども	
	個人	集団
提案型	1・2・3	4
受け入れ型	5・6	7

※数字の並びは事例番号を示す。

「提案型・個人」に該当する事例1は、子どもが持っていたフラフープに教師が「入れるよ」と言って、落ち葉を輪の中に投げ入れるところ(目立たせる:声かけ・物への働きかけ)から始まった。そして、葉を投げ入れることを促すため、教師がフラフープを持つと(目立たせる:物への働きかけ)、子どもは落ち葉を数回投げ入れた(表現する:返答)。1回目は失敗したが、葉を選び直して再び挑戦すると成功し、その場を去った。コントロールしやすい葉を選択できるようになった(自覚化)ことで、学びの了解点に達したと思われる。事例2では、教師が「固い選手権」とつぶやき、「これは柔らかいね」と落ち葉を触る姿を子どもに見せた(目立たせる:声かけ・物への働きかけ)ことをきっかけに、子どもは葉を集め、固さを確かめ始めた。葉をちぎり「きれいに割れた」と言う(表現する:発見)子どもに対して、教師は「きれい(目立たせる:声かけ)」「バサバサの葉っぱだね(付け加える)」と言葉を添える場面が見られた。その後、子どもは固さの異なる葉を数枚ちぎり、自ら活動を終えた。葉の固さとちぎりやすさを関係付けた

と考えられる。事例3は、教師が袋に落ち葉を投げ入れる姿を見せる(目立たせる:物への働きかけ)ことから始まり、袋からの距離を変え、成功・失敗を繰り返しながら葉の種類や投げ方をえていく姿(表現する:返答)が見られた。「受け入れ型・個人」の区分には、事例5・6が当てはまる。事例5は、黄色の葉を見せに来た子どもに対して「かわいいね」(目立たせる:声かけ)と教師が応えると、子どもは黄色の葉を選んで再び持ってきた(強調:身振り)。教師と子どもで黄色の葉の大きさを確かめ合うことで、子どもは黄色の落ち葉の大きさに一定の認識が得られたと考えられる。事例6は、子どもが葉にあいた穴から教師の方を見てきたので、教師も穴があいた葉を見つけ、子どもの真似をした(目立たせる:身振り)。さらに、穴のあいた葉を互いにのぞき合うことで、子どもは、葉にあいた穴の大きさが違うことや、穴のあいた葉はいろいろな種類があることを理解した。

このように、個人に働きかける場合、教師は「提案型」「受け入れ型」いずれも「目立たせる」働きかけを機に学びの自覚化を促していく傾向があると推察される。

一方、「提案型・集団」の事例4では、4人の子どもに「落ち葉をどこまで舞い上げることができるか」声かけをする(表現させる:一答)ことから、子どもが繰り返し試し始める(表現する:返答)。同時に、教師は「どこまでいった?」(もどす:確認)、「すごいね」(目立たせる:声かけ)などの働きかけを行った。葉の量や投げ方を工夫し、友達の手が届かないほど高く上がったところで、満足そうな表情をして活動を終えた。「受け入れ型・集団」の事例7でも、2人の子どもに「集めた葉っぱで何する?」(表現させる:多答)と働きかけたことをきっかけに、落ち葉を舞い上げる活動が始まった。その後、いくつかの教師の働きかけ(もどす:確認、表現させる:選択)や子どもの反応(表現する:返答、強調する:身振り)があった。落ち葉を2回舞い上げ、活動を終えた時点で、落ち葉が舞い落ちる様子の理解がなされたと考えられる。

いずれも集団への「表現させる」働きかけからスタートし、「もどす」「目立たせる」「表現させる」などの働きかけを行いながら、学びの自覚化を促すといった点が見られた。

#### 【全体考察・今後の展望】

1 教師と子どもの発話・行動の連続性・・・話題提供1では、教師の「表現させる」の出発点から、「目立たせる、もどす」の終着点までが一連の学びの芽生えから自覚に結びつくプロセスであることが見つかる。話題提供2においても「提案型」「受け入れ型」の2パターンが見出され、「目立たせる」から「もどす」や「表現させる」の連続した働きかけがポイントとして見えてきたと言える。

2 学びの変容(自覚化)・・・「了解点」という表現から、子どもの活動・思考の停止状況を教師の働きかけの中から引き寄せたところに、学びの自覚化への教師・子どもの一致点を見出していると解釈される。

3 今後の展望・・・今回は、わずかな事例による結果報告に過ぎない。連続性の精査をベースとして、事例収集と分析法の精緻化を図っていくことに研究の向上を期待する。

## 問題解決の力に焦点を当てた小学校理科における評価基準構築の試み

### 児童の記述分析を手がかりとして

○岩本 哲也<sup>1</sup>, 溝邊 和成<sup>2</sup>, 大久保 舞<sup>3</sup>, 三宅 理恵<sup>4</sup>, 流田 純美<sup>5</sup>, 塚田 紗子<sup>6</sup>

Tetsuya IWAMOTO, Kazushige MIZOBE, Hiroko SAKATA, Kouki HIRAKAWA, Rie MIYAKE, Emi NAGAREDA

<sup>1</sup>大阪市立味原小学校, <sup>2</sup>九州共立大学, <sup>3</sup>大阪市立東中川小学校, <sup>4</sup>大阪市立味原幼稚園,

<sup>5</sup>学校法人大宮学園大宮幼稚園, <sup>6</sup>(株)ボーネルンド

【キーワード】指導と評価の一体化, 評価規準, 評価基準, 問題解決の力, 思考・判断・表現

#### 1. 研究の背景と目的

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所, 2020）では、「評価規準の作成に当たっては、各学校の実態に応じて目標に準拠した評価を行う」と示されている。「指導と評価の一体化」を目指した研究も進められており(渡辺ら 2021, 小林ら 2025)、実践的な知見の蓄積も見られる。しかしながら、理科に対して苦手意識が高い教員や教職経験が少ない教員が多い学校で、各学年、各学級の実態に応じて評価規準を作成することは難しい。さらに、評価規準を基に評価基準を作成したり、基準達成に向けた個に応じた指導を考えたりすることは、非常に難易度が高い。

そこで、本研究は、問題解決の力（差異点や共通点を基に問題を見いだす力、既習の内容や生活経験を基に根拠のある予想や仮説を発想する力、予想や仮説を基に解決の方法を発想する力、より妥当な考え方をつくりだす力）に焦点を当て、問題解決場面（4場面）での記述内容に注目し、その特徴的表現を分析する。これにより、評価基準の具体化や、個に応じた指導の在り方に寄与することを目的とする。

#### 2. 調査方法

##### (1) 対象と実施時期

大阪市立 A 小学校 3 年生 56 名、4 年生 48 名、

表 2 問題解決の力に関する児童の表現事例

問題解決の力	レベル 0	レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4
問題の見いだし・記述なし	・出合った自然現象についての表現 ・看立はないが、手分けなし	・看立はよいが、手分けなし	・問題になっている ・なぜ、どうして+事象	・要因を探る問題となっている（～が関係しているだろうか） ・問題を扱う問題になっている（～にはどのような関係があるのだろうか） ・予想を含む問題になっている（～すれば、～なるのだろうか）	
予想や仮説の発想・記述なし	・問題と正対していない	・予想だけ	・予想と看立のつながりが不十分	・予想+根拠(既習内容や既往経験)	
解決の方法を発想・記述なし	・問題と正対していない ・予想を導く方法ではない	・予想だけ ・予想を導く方法ではあるが、理解欠陥ではない！（裏側あり、のみの計算） ・使用する道具のみ ・測定する対象の記入がない	・予想を基に、考える条件を考え 「あり・なし」の2つの方法がある ・実験前後で測定している	・考える条件だけでなく、考えない操作を同時に根拠考へている （「考える操作以外は同じにする」という言葉ではなく） ・結果の見通しを作んでいる	
より妥当な考え方・記述なし	・予想のみ ・問題に正対している解説のみ ・予先+問題と正対していない解説	・予想と解説のつながりが不十分 ・1点の対象で解説 ・予先からほんの少し解説(知識だけ)	・予先+解説(充満性が高い)	・他者の結果(客観性)を考慮している（C 時中 C 席） ・複数対の結果(客観性)を考慮している（C 時中 C 席、D 時中 D 席） ・見方を曇らせている ・異なる複数の方法を問題付けている ・学んだことを身の回りの自然現象に当てはめている	

5 年生 58 名、6 年生 49 名を対象に、2025 年 4 ~6 月に行われた。

##### (2) 対象場面のデータ収集と分析方法

第 3 学年「風とゴムの力の働き」「身の回りの生物」、第 4 学年「季節と生物」「天気の様子」「雨水の行方と地面の様子」「電流の働き」、第 5 学年「植物の発芽、成長」「天気の変化」、第 6 学年「燃焼の仕組み」「植物の養分と水の通り道」「人の体のつくりと働き」の内容で、問題解決の力を育成する場面での児童の記述（文、図や絵）を収集した（表 1）。得られた記述を分類する。なお、分類・整理等にあたっては、6 名中 5 名以上の一致率を担保した。

表 1 児童の記述収集件数 n=1815

問題解決の力	3 年	4 年	5 年	6 年	計
問題の見いだし	112	48	—	98	258
予想や仮説の発想	—	96	116	49	261
解決の方法を発想	56	48	116	245	465
より妥当な考え方	56	240	290	245	831

表内数字は、件数を示す。

#### 3. 結果と考察

得られた記述を基に、特徴的な表現事例を表 2 に整理した。表 2 により、各表現に対する指導の在り方をより詳述できると考える。今後、更なる事例収集と分析の精緻化を図る。また、表現事例を基に、児童が自ら評価基準を設定するといった授業実践を行う予定である。

#### 引用・参考文献：略

## 資料 5

### 「がんばる先生支援」研究支援 研究発表会・公開授業のご案内

令和 7 年 7 月 7 日

選定番号 230

大阪市立味原小学校

校(園)長 井上 克己

研究テーマ 理科の学びをつなぐ「評価基準と指導の手立て」の開発

～「思考・判断・表現」の観点から見る第3～6学年の実態分析と系統的・発展的な指導～

1 日 時 令和 7 年 8 月 29 日 (金) 13 時 55 分～16 時 30 分 (受付 13 時 30 分から)

2 会 場 大阪市立味原小学校

〒543-0023 大阪市天王寺区味原町 8-19 電話 06-6768-2288

・大阪メトロ千日前線「鶴橋駅」下車 1 番出口 徒歩 3 分

・J R 「鶴橋駅」、近鉄「鶴橋駅」下車 徒歩 5 分

3 時 程

	13:30	13:55	14:40	14:50		16:30
受付	公開授業 6年「植物のつくりとはたらき」 授業者：岩本哲也		移動休憩	全体会		
				研究発表	研究討議	指導講評

4 募集定員 無し

5 参加申込

申込期間 令和 7 年 7 月 7 日 (月) ~8 月 26 日 (火)

申込方法 右の 2 次元コードより申込みをお願いします

※必ず、事前に申し込みをしてください。

※ご質問等ございましたら、大阪市立味原小学校

06-6768-2288 担当 岩本まで、ご連絡ください。

2025年8月29日（金）大阪市立味原  
小学校公開授業参加申し込み



6 指導講評・講師

神戸市立雲中小学校 主幹教諭 下吉 美香 先生

(2019~2020 年には、評価規準、評価方法等の工夫改善に関する調査研究委員（国立教育政策研究所）を経験。共著に、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校理科』（国立教育政策研究所）等がある。現在、日本理科教育学会「理科の教育」編集委員として活躍。)



7 その他の

山中謙司（北海道教育大学旭川校准教授、元 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 学力調査官・教育課程調査官）、川上真哉（帝京大学准教授、前 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 学力調査官・教育課程調査官）、田村正弘（武蔵野大学特任教授、元 全国小学校理科研修協議会会長）、野原博人（立命館大学教授）、寺本貴啓（國學院大學教授）、久坂哲也（岩手大学准教授）、三井寿哉（帝京平成大学准教授）、鈴木康史（横浜市立三保小学校長）、鳥居圭（江戸川区立二之江第二小学校）などの理科に精通された先生方が全国から参加します。全国の先生方とつながりを深めていただければと思い、全体会終了後、懇親会も予定しておりますので、ぜひご参加ください。



スポーツテスト全国平均点数との比較

種目	握力		上体起こし		長座体前屈		反復横とび		20mシャトルラン		50m走		立ち幅とび		ソフトボール投げ		
	全国平均 ポイント	↓↑															
1年	全国平均(男子)	4	12	0	4	6	2	4	7	8	4	3	7	4	3	7	
	全国平均(女子)	3	3	0	4	2	3	4	6	6	4	3	5	4	2	0	
2年	全国平均(男子)	4	2	3	5	5	10	5	3	6	5	1	11	5	8	1	
	全国平均(女子)	4	0	0	5	1	5	1	1	5	0	4	5	3	1	5	
3年	全国平均(男子)	5	0	3	6	2	8	5	1	8	6	11	1	6	3	3	
	全国平均(女子)	5	0	6	6	7	11	5	0	9	6	6	10	1	5	4	
4年	全国平均(男子)	6	3	2	6	5	13	6	8	1	7	2	2	6	3	6	
	全国平均(女子)	6	0	0	7	2	3	6	7	3	7	2	3	6	1	6	
5年	全国平均(男子)	6	1	1	7	5	6	6	7	5	8	10	1	7	13	2	
	全国平均(女子)	7	7	0	8	6	5	7	10	4	8	7	3	7	11	2	
6年	全国平均(男子)	7	7	8	8	13	8	7	14	8	8	5	11	8	13	6	
	全国平均(女子)	8	4	0	8	10	3	7	12	0	8	5	1	7	6	1	
		39	23		64	77		76	59		50	54		68	43		144
																	103
																	51
																	35

平均-2以下人數  
平均+2以上人數

## 令和7年度 食に関する指導計画(案)

未来を切り拓く学力・体力の向上 部  
健やかな体の育成 課  
健康教育・食育の推進 係  
【担当:志水】

### 目的

学校給食を通して、児童が生涯を健康に過ごすために必要な食に関する知識や意識の基礎・基本を知らせ、自ら健康管理できる力を育てる。

### 実施方法

- 栄養教諭が、学級を訪問し指導を行う。
- ・授業時間（学級活動）全学級、年間2回程度行う。  
(日時については各担任と調整)
- ・給食訪問（給食時間）は隨時
- ・「きゅうしょくだより」（児童向け）…毎月初め・夏休み前・冬休み前・給食週間の計14回発行。
- ・「食育だより」（保護者向け）…6月、9月、11月、2月の計4回、食育の日に合わせ、19日付発行予定。

## 指導内容

学年	主　題	実施月予定
1年	たべものなまえをおぼえよう	7月
	すききらいをしないでたべよう	1月
2年	ほねやはをじょうぶにしよう	5月
	しゅんの食べものについて知ろう	10月
3年	野菜を食べよう	6月
	よくかんで食べよう	11月
4年	飲み物について考えよう	6月
	おやつについて考えよう	10月
5年	魚について知ろう	4月
	和食について知ろう	11月
6年	食品表示を見て命を守ろう～食物アレルギー～	5月
	バランスのとれた食事を考えよう	12月

## 職場で固定席を廃止し、共通の机・椅子を使う利点

### ①コミュニケーション・協働の活性化

- ・部署やチームの垣根を越えて席が近くなることで、普段交流が少ない人同士が話すきっかけが増える。
- ・打合せや相談がしやすくなり、情報共有やアイデア創出が促進される。

### ②スペース効率の向上

- ・常に全員が出勤するとは限らない現代では、固定席を全員分確保すると無駄が生じやすい。
- ・共通テーブルを導入すれば、オフィスや面積を有効活用でき、空いたスペースを別の用途に転用できる。

### ③柔軟な働き方への対応

- ・在宅勤務やリモートワークと組み合わせやすくなる
- ・出勤人数に応じて席を調整できるため、フレキシブルな勤務形態を支援できる。

### ④清潔で整理された環境の維持

- ・固定席があると私物や資料が積み上がりやすいが、共通席だと「毎日片づける」習慣が生まれ、整理整頓された職場環境が保たれる。
- ・クリーンデスクポリシー（机上を常に清潔に保つルール）とも相性がよい。

### ⑤組織文化の変化・意識改革

- ・「自分の席」という感覚をなくすことで、職場全体がオープンで平等な雰囲気になりやすい。
- ・部署をまたいだ一体感を生み出し、組織文化の刷新につながる。